

経営と健康

生誕千二百五十年「弘法大師の生涯」

第二回

講師 一龍齋貞花



仏教講談掘り起しをしている貞花、真言宗はじめ三宗派派遣講師を拜命し、各宗派祖師ご二代記を口演。

故郷満濃池の灌漑工事を仰せつけられた空海は、

「大水で決壊し多くのお百姓さんが困っている。仏教は仏様を拜むことだけではない。お釈迦様は、生きとし生ける者を救うのが仏教であると教えられた。よし総てを投げ出して尽そう」

高さ24・24メートルの堤防を築かなければならない。今のように土木工事の機械はありません。村人たちは、

「お上人様と一緒に働ける、有難いことじゃ」と、総出で暑い盛りの夏の日も精を出し、みるみるうちに新しい工法の土手が造られ、役人たちが3年掛かって出来なかつた工事が、なんと一年足ら

ずで完成。

唐の国で見た運河をヒントに、今日のアーチ工法に近い素晴らしいもので、川の中に杭を打ち並べてそれに木の枝や竹などを結び付けて、護岸のためのしがらみも造りました。

大林組が発行している機関誌の中で、先年弘法大師が修築したこの満濃池の想定復元を試みたということは、現代にも通じる優れたものであることがわかり、決壊することなく1200年たった今も丸亀平野の数千町歩の広い田畑をうるおしています。

空海上人は、正に土木工学博士でもありました。

二年後、東寺を賜り真言の道場にし、功德の全ての集まりと言われる五重塔を建立。現在の五重塔は徳川家光が再建。

京都を代表する建物であるから、この五重塔より高い建物を建ててはいけないう決りがありました。現在高い建物が建てられています。

徳川家の菩提寺大樹寺の山門から、岡崎城が見えなきやいけない、一時高い建物が計画されたが許可されず岡崎市は決りを守っています。

嵯峨天皇は、空海を東大寺の別当、責任者にも任命されています。

日本最初の私立大学しゅげいしゅちいん綜芸種智院

当時京都に大学が一つあったものの、上流階級の子弟だけが入学出来、一般市民のための教育機関はゼロでした。

「勉強したくとも貧しくて学問することが出来ないとは、学問に身分の上下があつてはいけない」

天長5年(828)東寺の隣に日本最初の私立大学綜芸種智院を創設、日本最初の庶民のための学校で、教師と生徒に完全給食を与えることまで実行、教育者でもありました。

ただ、残念ながらこの高い理想の学校もご入定にゅうじょう(入滅)されて10年後、学校が創設17年目、経営困難のため廃止されてしまった。この学校が続いていたならば多くの人材が育つたに違いありません。

この時に、日本最初の字引をお作りになられ、いろは歌も言われていますが、これは柿本人麻呂が無実の罪で牢に入られた時、咎なくて死す、という暗号文の手紙、忌み歌だから手本にはいけないと貝原益軒が言っていて、解りやすく整理されたアイウエオをお作りになったという説もあり、いろは歌以前は

弘法大師作と辞書に書かれていたが、今は書かれていない。

空海、嵯峨天皇、橘逸勢を日本書道史上三筆。

空海、菅原道真、小野道風を入木道の三筆。空海は両方に入っており新しい書法を日本に輸入し、後世に及ぼした影響も大きく日本書道史上最大の存在と言われています。

仏具の独鈷で川の中を叩かれますと、温泉が湧きだした修善寺の独鈷の湯のように、石炭をはじめ石油や薬草、温泉の効用などを人々に教え、飲み水に困っている土地の人には、水の出そうところを教えてやりました。

お寺を建てるのに必要な銅の権利も持ち、やはり病には蓬がいなど医学にも詳しく、法力をもって多くの人のために尽されました。

各地を巡錫して歩く精力的な活動に、いかに空海上人といえど疲れを覚えぬはずがありません。天長八年、気候のよい春というのにご自分の優れぬ日が続きます。

「お師匠様、少しお休みになられては如何でしょうか」

弟子たちは心配でなりません。嵯峨天皇からも

「二日も早く健康を回復し、朗らか姿で宮中に参内するように」

と、温かいお心のおふれるお手紙も届けられました。

しかし年が明けるや、自分の身体の衰えをはつきり感じるようになり、

「師の恵果阿闍梨が亡くなられた61歳まであと1年だ」

高野の峰に続く小道に、真つ赤な曼殊沙華の花が咲き乱れる天長9年9月24日。

空海上人は、万灯会の法要を営みました。万灯万華会というこの法要は、総ての罪を懺悔し、1万ものお灯明を灯し仏にお花を捧げて供養するものです。

高野山の奥の院に、燈籠が沢山奉納されています。

万灯会が終わると高野山に秋が深まってきました。

空海上人が弟子達に書き残した教えを遺誠といい、遺言の教えです。

「総ての真言の流れをくむ弟子達に言うておきたい事がある」と、書き出されています。

この遺誠を書き終えたのが、承和元年(834)5月28日

明けて承和2年3月15日

空海上人は多くの弟子をお集めになりました。

部屋に入りきれず、廊下から庭にまで大勢のお弟子が集まってきた。

何故集まるのか、弟子達は知っていました。

「来るべき日が、到頭来たのだ」
暖かい日差しとはうらはらに、皆の心の中は冷たく氷ついていた。

「これから私の言うことをよく聞くのだよ。私はもうあとほんのわずかしか皆と一緒にこの世にいられないだろう。あなた達は心を慎んで真言の教えを守っていくのですよ。」

私がこの世の命を終えるのは来る3月21日の寅の刻になるだろう。私の大切な弟子達よ。決してその事を嘆き悲しんだり泣いたりしてはいけない。私は62歳、仏法の世界に40余年いることが出来た。はじめは百歳まで生きて皆と一緒に

真言の教法を守り発展させようと思っていた。でも私は弟子の皆を信ずべきであり、皆に任せることにしたのだ」

師空海の言葉に弟子たちは泣き続けていました。泣き声は部屋中に広がり更に廊下にも庭にも高まってきました。や

がてその泣き声もやみ、山椿の花がポトリと落ちる音が闇に聞こえるほどの静寂に包まれ、皆泣きやみ、いつか足音を忍

ばせ一人、又一人部屋から出ていきます。

空海上人は二室にこもられ結跏趺坐し大日如来の秘印を結び、お釈迦様ご入

滅から56億7千万年のちという遠い未来、この世に現れて人々を救うといわれます

彌勒菩薩のご真言を静かに唱えはじめました。

1188年前の承和2年3月21日、まだまだうす暗い静寂の中で真言を唱え続ける空海上人。やがて暗闇の中からほのかな光が差ししてきたかと思うや、たちまち金色の光が部屋中に満ちあふれ遂にご入定されたのでございました。このご入定から86年後に弘法大師の称号を贈られました。

お亡くなりになったのではなくご入定といつて今も毎日お食事が供え続けられています。

各地に多くの奇跡、法説が語り継がれています。

ご生誕千二百五十年、弘法大師空海上人のご二代記を申し上げます。